

<特集「アスペクト」>

## ラトヴィア語

堀口 大樹

(1) ヤーニスはもう来た。

Jānis	jau	atnāca.
Janis	already	come, pf. past.

単純時制過去形 PFV 「来る」接頭辞動詞 *atnākt* である。IPFV の無接頭辞動詞 *nākt* の単純時制過去形 *nāca* では来る途中、もしくはよく来ていたという過去の習慣と理解される。

(2) ヤーニスはもう来ている。

Jānis	jau	ir	atnācis.
Janis	already	be pres.	come, pf. apastp.

いわゆるパーフェクトの複合時制 (be 動詞に相当する動詞 *būt* の人称形 + 能動過去分詞の人称形) 現在形を用いる。動詞は PFV の *atnākt* 「来る」である。

(3) ヤーニスはまだ来ていない。

Jānis	vēl	nav	atnācis.
Janis	still	not be, pres.	come, pf. apastp.

(2)の否定である。

(4) ヤーニスはまだ来ない。

Jānis	vēl	nenāk.	/ neatnāk.
Janis	still	not come, impf. pres.	not come, pf. pres.

IPFV は、到着の瞬間を含意しないため、IPFV の否定は、来ることの打消しである。PFV では、到着する瞬間が話題となるため、PFV の否定は「来る途中であるが、到着はしていない」と解釈できる。時制は単純時制現在である。

(5) ヤーニスはもうすぐ来る。

Jānis	drīz	atnāks	/ nāks.
Janis	soon	come, pf. fur.	come, impf. fur.

単純時制未来形では PFV, IPFV のどちらも可能である。PFV では到着の瞬間が IPFV よりも積極的に表される。

(6) あっ、ヤーニスが来た。

Re,	Jānis	atnāca	/ nāk.
see	Janis	come, pf. past.	come, impf. past.

PFV の単純時制過去形と、IPFV の単純時制現在形が可能である。前者はまさに到着の瞬間に対し、後者は、近づいて来る動作プロセスを名指ししており、「あっ、ヤーニスが来る」に相当する。

(7) おとといヤーニス came 来たよ。

Aizvakar	Jānis	atnāca.
the day before yesterday	Janis	come, pf. past.

(1)と同様である。

(8) おとといヤーニスは来なかったよ。

Aizvakar	Jānis	neatnāca.
the day before yesterday	Janis	not come, pf. past.

(7)の否定である。

(9) 私はあのリンゴをもう食べた。

Es	jau	apēdu	ābolu.
I	already	eat, pf. past.	apple

PFV の単純時制過去を用いる。「食べる」は一般に ēst–apēst のアスペクト対立をなすとされる。

(10) 私はあのリンゴをまだ食べていない。

Es	vēl	neesmu	ēdis	/ apēdis	ābolu.
I	still	not be, pres.	eat, impf. apastp.	eat, pf. apastp.	apple

パーフェクトの複合時制現在を用いる。IPFV の neesmu ēdis では「そもそも食べていない、口をつけていない」のに対し、PFV の neesmu apēdis では「口はつけたが食べきっていない」という差異が生じる。

(11) 彼は今そのリンゴを食べています。

Viņš	tagad	ēd	ābolu.
he	now	eat, pres.	apple

発話時点で進行中の動作は単純時制現在で示される。アスペクト対立のある動詞の場合は IPFV が動作の進行を示す。

(12) 窓が開いている。窓が開いていた。

a) Logs	ir	vajā.	/ atvērts.
window	be, pres.	out	open, pf. ppastp.
b) Logs	bija	vajā.	/ atvērts.
window	be, past.	out	open, pf. ppastp.

一般に副詞 vajā 「開いた状態で」を be 動詞と共に用いる。もしくは動詞 atvērt の受動過去分詞である atvērts 「開けられた」を be 動詞と共に用いる。atvērt 「開ける」は PFV とみなされ、対応の IPFV は vērt vajā という分析的構文を用いる。

a)が現在時制、b)が過去時制である。

受動態には動的受動と静的受動がある。進行中の動作を示す動的受動は、助動詞 tikt と動詞の受動過去分詞で表され、PFV・IPFV とともに結びつきアスペクト的には中立である。終了後に結果を残す意味でパーフェクトの静的受動は、助動詞 būt と動詞の受動過去分詞で表される。

(13) 私は毎朝新聞を読む。

Es	katru rītu	lasu	avīzi.
I	everyday	read, impf. pres.	newspaper

一般には IPFV の動詞 *lasīt* が単純時制現在で表され、習慣や恒常的真理を示す。しかし、*Es katru rītu izlasu visu avīzi.* 「私は毎朝新聞をすべて(*visu avīzi*)読む」*Es katru rītu izlasu trīs avīzes.* 「私は毎朝3紙の新聞(*trīs avīzes*)を読む」のように毎朝読む特定量が話題となる場合には PFV 動詞の使用の方が一般的である。

(14) 彼女は結婚している。

<i>Viņa</i>	<i>ir</i>	<i>precējusies.</i>
she	be, pres.	marry, impf. apastp. refl.

既婚か未婚かが話題となっている場合、動詞 *būt* の現在形 *ir* と IPFV の動詞 *precēties* 「結婚する」の能動過去分詞 *precējusies* を合わせた複合時制現在で表現する。既婚か未婚かという動作そのものの有無が話題になる場合には IPFV の動詞を使う。PFV の動詞 *aprecēties* の場合には、誰かと結婚していることが前提で、既婚か未婚かは焦点ではなくなり、「いつ」「どこで」「誰と」「何回目に」などの具体的な情報が付加されるのが普通である。

(15) 私はその頃学校へ通っていた。

<i>Tolaik</i>	<i>es</i>	<i>gāju</i>	<i>skolā.</i>
at that time	I	go, past.	school

動詞 *iet* 「行く」の単純時制過去形を用いる。過去の習慣的動作を示す特別な手段はラトヴィア語には存在しない。興味深いのは、動詞 *iet* 「行く」は一般に動作の方向性を示す前置詞と共に用いられるが、(例：*iet pie ārsta* 「医者のところに行く」、*iet uz skolu* 「学校へ行く」)、学校へ(生徒として)通う場合には補語に位格をとる。*Tolaik es gāju uz skolu.* では、学校で学ぶ者でない者の発話か、その頃学校へ行っていた(行く途中であった)という意味になる。

(16) 私はヘルシンキに行ったことがある。

<i>Es</i>	<i>esmu</i>	<i>bijis</i>	<i>Helsinkos.</i>
I	be, pres.	be, apastp.	Helsinki

経験を示す複合時制である。ここでは *be* 動詞にあたる動詞 *būt* の能動過去分詞 *bijis* が用いられている。

(17) やっとバスは走り出した。

Beidzot	autobuss	sāka	braukt.
finally	bus	start, pres.	go (not on foot), inf.

開始の意味は、ie-や aiz-といった動詞接頭辞と再帰語尾の組み合わせで表されることがあるが、動詞 braukt 「(乗り物で) 行く」は開始のアクツィオンスアルトを持たないため、sākt 「始める」に動詞不定形を添えた分析的な表現をとる。sākt や turpināt 「続ける」、beigt 「終える」、grasīties 「しようとする」といった位相動詞が IPFV と結びつくのは、文法化の程度が低いラトヴィア語において数少ない「規則」である。

(18) 昨日彼女はずっと寝ていた。

a)Vakar	viņa	gulēja	visu dienu.
yesterday	she	sleep, past	all the day
b)Vakar	viņa	nogulēja	visu dienu.
yesterday	she	sleep, past	all the day

一般には a) のように IPFV の動詞 gulēt 「寝る」の単純時制過去を用い、visu dienu 「一日中」のような継続時間の対格をとる。b) のように、長時間継続する動作を示すアクツィオンスアルトの動詞 nogulēt 「寝る」を用いることも可能であるが、動作が長く続いたことに対する話者の否定的態度が示される。

(19) 私はそれをちょっと食べてみた。

a) Es	to	pagaršoju.	
I	it	taste, pf. past	
b) Es	to	pamēģināju	pagaršot.
I	it	try, pf. past	taste, pf. inf.

a) は「(食べ物を) 試す」という動詞 garšot の PFV 動詞 pagaršot が単純時制過去で用いられる。b) のように動詞 pamēģināt 「試みる」という動詞を使った分析的表現も可能である。それぞれ副詞 mazliet 「少し」を添えてもよい。

(20) 彼はリンゴをみんなに分け与えた。

Viņš	visiem	sadalīja	ābolus.
he	all	divide, past.	apples

いわゆる分配の aspekta の形態的手段はラトヴィア語には存在しない。

(21) さあ、行くよ！

a) Nu, ejam!  
well go, pres.

b) Nu, iesim!  
well go, fut.

c) Nu, gājuši!  
well go, apastp.

a)は動詞 *iet* 「行く」の直説法現在時制の1人称複数形で最も一般的である。

b)は同じ動詞の直説法未来時制の1人称複数形である。今の場所を発つことが自明の時には a)の形を用いることが多い。

c)は同じ動詞の能動過去分詞男性複数形である。これはロシア語に見られる過去形を使った表現から影響を受けたものだとされ、動詞 *iet* 以外の他には *braukt* 「乗り物で行く」、*celt* 「(寝ている人を)起こす」が、能動過去分詞男性複数形で用いられる<sup>1</sup>。Rozenbergs(2004)は「ラトヴィア語文体論」の中で、*ejam!*に対し“let’s go!”と英訳を添え、*gājuši!*に対し“let’s be off!”と英訳を添えているように、俗語的で急き立てるニュアンスがある<sup>2</sup>。

(22) 地球は太陽の周りを回っている。

Zeme	griežas	ap	sauli.
earth	turn round, impf. pres.	around	sun

IPFV 動詞 *griezties* 「回る」の単純現在時制が用いられる。

<sup>1</sup> Zemzare, D. 1968. *Gājuši, braukuši, cēluši!* Latviešu valodas kultūras jautājumi. 4. laidiens. 63-65. Rīga.

<sup>2</sup> Rozenbergs, J. 2004. *The stylistics of Latvian*. 177. Rīga.

IPFV のように、制限なく持続する動作の時間表現には対格を用いる。

Zeme griežas	ap	sauli	365	dienas.
earth turn round, impf. pres.	around	sun		days

地球は太陽の周りを 365 日（間）回っている。

ちなみに地球の回転周期を一回りの動作として示す際には PFV が用いられ、所要時間を示す時間表現は位格となる。

Zeme apgriežas	ap	sauli	365	dienās.
earth turn round, pf. pres.	around	sun		days

地球は太陽の周りを 365 日で（かけて）回っている。

(23) あの木は今にも倒れそうだ。

Izskatās,	ka	tas	koks	nokritīs.
seem	that	that	tree	fall down, pf. fut.

将然相は存在せず、様態を示す動詞 *izskatīties* 「のように見える」を用いる。

(24) (私は) あやうく転ぶところだった。

Es	gandrīz	vai	nokritu.
I	almost	or	fall down, pf. past.

未実現の事態でも動詞は PFV の *nokrist* 「転ぶ」を用いる。対応の IPFV の *krist* は用いない。*gandrīz vai* は「あやうく」という定型句である。

(25) 明日お客が来るので、パンを買っておく。

Tā kā rīt	būs	viess,	nopirkšu	maizi.
since tomorrow	be, fut.	guest	buy, pf. fut.	bread

準備の観点には *iepirkt* は「調達する」のように、接頭辞 *ie-* が形態的手段として存在するが、この場合長期間に大量の物資を買っておくというニュアンスがあり、この文脈にはそぐわない。よって PFV 動詞 *nopirkt* の単純時制未来形を用いる。

(26) 私は市場に行った時、この袋を買った。

Kad	es	biju	tīrgū,	nopirku	šo maisu.
when	I	be, past.	market	buy, pf. past.	this bag

市場で袋を買った場合には、「市場にいた時」と kad 節では be 動詞 būt を用いる。「買う」は PFV の単純時制過去形である。

(27) 私は市場に行く時、この袋を買った。

a) Pirms	es	braucu	uz	tīrgu,	nopirku	šo maisu.
before	I	go, past.	to	market	buy, pf. past.	this bag
b) Kad	es	braucu	uz	tīrgu,	nopirku	šo maisu.
when	I	go, past.	to	market	buy, pf. past.	this bag

a)のように「市場に行く時」を「市場に向かう前」と捉えると、pirms 節（英語の before 節に相当）では動詞 braukt 「行く」の単純時制過去形を用いる。

b)のように「市場に行く時」を「市場に行く途中で」と捉えると、kad 節（英語の when 節に相当）では動詞 braukt 「行く」の単純時制過去形を用いる。

「買う」の動詞はどちらの場合も PFV の単純時制過去形である。

(28) 私は彼が市場でこの袋を買ったのを知っていた。

Es	zināju,	ka	viņš	nopirka	šo maisu	tīrgū.
I	know, past.	that	he	buy, pf. past.	this bag	market

ラトヴィア語の複合時制は、動作の結果残存を示す機能と、先行性のような、基準とする時間点とは異なる時間点を相対的に示す機能を併せ持つ。しかし動詞 zināt 「知る」のような状態を示し点的に表現されない動詞では、「買った」時点の先行性を示す必要はない。基準となっている単純時制過去形の「知っていた(zināju)」よりも前に彼が買ったことを示す必要がある場合には、単純時制過去形 nopirka ではなく、複合時制過去形 bijis nopircis を用いる。

「知っていた」が uzzināju 「知った」となると、「知る」時点よりも「買う」時点が先行しているので、「買った」は複合時制過去形 bijis nopircis となるべきである。



「知っていた」が *zinu* 「知っている」となると、「買う」行為は単純時制過去形の *pirka*, もしくは複合時制現在形 *ir nopircis* となる。例えば、買った袋が目の前にあったりするなど、買った行為(の結果)が何らかの形で話題となっている場合は複合時制現在形を用いるべきである。

結果性 (*resultativity*) がアクチュアルかどうかは発話者の意図や文脈によるところが多い。結果性の表示に無関心な場合においては、単純時制過去形と複合現在現在形の競合 (*competition*) が生じる<sup>3</sup>。また本来複合時制の使用が期待される場合における単純時制の使用を、複合時制を持っていないロシア語の影響であると指摘する立場もある<sup>4</sup>。

#### 略号

sg.=単数, pl.=複数, pres.=現在形, past=過去形, fut.=未来形 pf. \*=perfective (完了アスペクト, PFV), impf. \*=imperfective (不完了アスペクト, IPFV) (\*本アンケートでは接頭辞によるアスペクト対立を持つ動詞にのみ表示) aresp.=能動現在分詞, apastp.=能動過去分詞, ppresp.=受動現在分詞, ppastp.=受動過去分詞, be.=動詞 būt 「ある, いる」, inf.=不定形, refl.=再帰形, not.=否定辞

---

<sup>3</sup> Kalnača A. 2008. Saliktās tagadnes lietojums mūsdienų latviešu valodā. *Valodas prakse : vērojumi un ieteikumi*. 3. Rīga. 61-68.

<sup>4</sup> Lokmane I. 1988. Veida un laika nozīmju mijiedarbe latviešu valodas darbības vārda sistēmā. *Latviešu valodas kultūras jautājumi*. 24. laid. Rīga. 109-118.